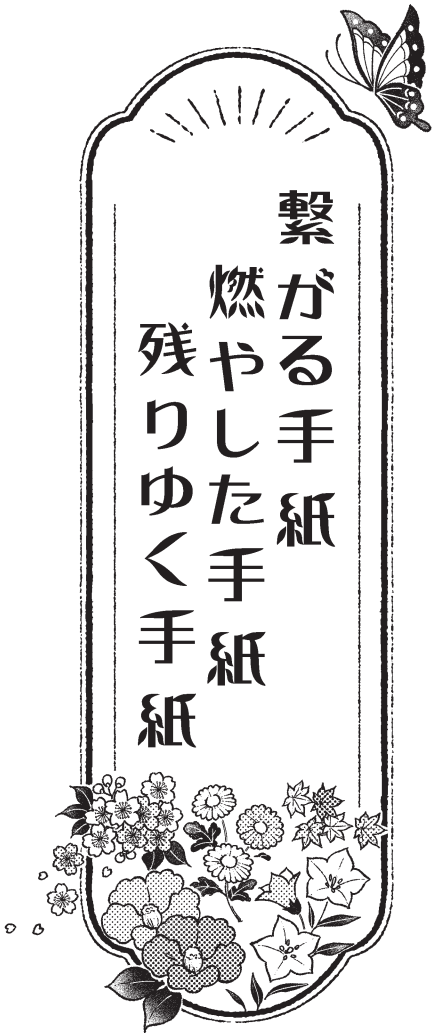

ふゆ

この日、平岡真次郎が参加した三橋家の新年会は、いつにもまして賑わっていた。弦楽隊の演奏が鳴り、招待客たちのおしゃべりがさんざめく。しかしそんな中、平岡は一人、入口近くでもうだいぶ長い間突っ立っていた。開始時間を過ぎても一向にやってこない友の到着を待っているのだ。

年末に大きな仕事が一段落したと思ったら、あっという間に新たな年が明け、やれ新年の挨拶だ、やれパーティーだ、新しい相談だ事件だ、と、あちこち駆けずり回る日が続いていた。そんな日々の中でも、平岡がこの場に足を運んだのには理由がある。今日のパーティーは、自身がこの家で書生をしていた頃から何かと世話を焼いた三橋家令嬢・琴の婚約披露の場でもあるからだ。

しかし平岡は、こういう煌びやかな場はどうも苦手である。居心地の悪さを感じながら、もう何度目か、宴会場の扉の向こうに目をやったその時。ふいに入口が開き、門番が新たな来客を告げた。

「瀬戸宗介子爵、ご到着でございます」

——やっと来たか

息をつきながら首を伸ばして扉の方を見ると、遠くからでもそれと分かる、己の待ち人が颯爽と歩んでくるところだった。

いつもは緩やかな曲線を描いて七三に整えられている黒髪が、今日はすべて後ろに撫でつけられている。元々穏やかな人間ではあるが、その垂れた目が投げかける視線はいつも優し気。高い鼻筋はまっすぐで、理知的である。上背もあり、今日は社交仕様の身なりをしていることもあって、非の打ち所がない。瀬戸宗介は、ただそこにいるだけで周囲の目を引く、華やかな色男だった。

瀬戸家はもともと、三橋や、平岡の故郷である、小さな島国を治めていた領主の家である。現当主たる瀬戸宗介子爵は、もとは東京生まれの東京育ちで、幼少の頃に瀬戸家の養子となっていた。華族といえば東京に暮らすものであるけれど、瀬戸の場合は、縁組をきっかけに東京を離れ、島での教育を一手に担っていた平岡家に預けられた。以来、瀬戸と平岡とは共に野山を駆けまわり、成績やら運動やらを競い合い、同じ釜の飯を食べ、並べた布団で寝起き

し、同じ年の兄弟のように過ごした仲である。平岡が苦手なことは瀬戸が得意な一方、その逆もまた然り。二人の関係は、互いを補い合える同じ歳の兄弟であり、無二の友、とでもいうべきものだった。高校に進む頃、瀬戸は家督を継ぎ東京に戻り、平岡は島に残ったものの、再び道は交わり、志を同じくして今は共に弁護士として働く仲間となっている。

とはいえ一応、元領主と元領民、かたや子爵で、かたや平民、さらに言えば、雇い主と雇われ者である。しかし瀬戸がそういったことに頓着しないおおらかな性格の持ち主なものだから、平岡も遠慮なく付き合うことができているのだった。よって、盛大に遅刻をしながらも悠然と歩いてくる友に寄っていった平岡は、きっぱりと言い放つ。

「遅い」

「電話が終わらなくてな。なかなか長い相談だった」

「どれだけ長引いたんだよ。適当に切り上げろっていつも言ってるだろ」

小声で文句を言いながら、平岡は目を動かして今日のパーティーの主催者を探す。

「お前が来たら三橋様が挨拶したいとおっしゃっていた。行くぞ」

そう言って平岡は瀬戸を連れ、会場の奥へ進んでいく。先ほどまではろくにしゃべらなかった平岡も、瀬戸が一緒だとやけに挨拶をされた。

――こういうのが面倒なんだ

内心でうんざりしつつ適度に会釈を交わしながら、目当ての人物を探す。ほどなくして平岡が三橋を見つけた時には、相手もちょうど二人の方に向かって歩いてくるところだった。平岡もそれなりの背丈はあるが、さらに背の高い瀬戸は、混雑の中でもよく目立つ。歩いている間に、彼らは三橋に見つけられたのだ。

「宗介様。ようこそお越しくださいました」

「こちらこそ招待ありがとう。相変わらず豪奢なことだ」

恭しく挨拶をする三橋に対し、瀬戸は改めてあたりを見ながら礼を述べた。

「いや、お恥ずかしい。不肖の娘の婚約披露もあると思うと、妻だけでなく私まで気合が入ってしまいまして」

「当然のことじゃないか。私も楽しみにしている」

そんな会話を交わす二人の元に、一人の令嬢が近づいてきた。ふんわりとしたドレスは結い上げた髪に良く似合

い、きっちりと施された化粧が美しい瞳を際立たせている。知らない女性だ、と一瞬で感じた平岡だったが、声を聞いて目をみはった。
「ごきげんよう、宗介様。本日はお越しくださり、ありがとう存じます」
――琴様じゃないか
平岡が書生時代に妹のように世話を焼き、異次元のはねっかえりぶりに悩まされたのも、もう昔のこと。おっとりとした調子で礼を述べる姿は、令嬢としてすっかり堂に入っている。
――あのお転婆のお嬢様がこうなるとは
平岡は内心の「感嘆」をなんとか飲み込みながら、これから半年もしないうちに子爵家に輿入れする眼前の令嬢、三橋琴を見る。
「おめでとう。琴ちゃんの結婚披露と聞けば、来ないわけがない。真もとても喜んでいるよ」
突然自分の方に水を向けられ、平岡は内心戸惑った。しかし小首を傾げながらにっこりと笑んだ琴に、平岡もまた微笑み返し、祝いの気持ちを込めて小さく頭を下げる。
ふいに、三橋が瀬戸に尋ねた。
「いかがですか、平岡の働きは」
「弁護士としては、僕より優秀だね。年末まで横浜の方で刑事事件の弁護をやっていたんだが、その裁判で無罪を取ってきた」
「ほう、犯人が無罪、ですか？」
「あまり聞かないだろう。刑事で無罪判決を取るのは難しいんだ」
さようでございますか、と答えた三橋は目尻を下げ、ちらりと平岡に視線をくれた。よくやっている、とでも褒めてくれているようなかつての恩人に対し、平岡は再び軽く頭を下げる。するとその間に、使用人が三橋のもとにやってきて、何やら耳打ちをした。一通り話を聞いて、了解した、というように頷いた三橋は、瀬戸に告げた。
「申し訳ございません。少々、呼ばれてしまったようで。失礼いたします。どうぞ本日はごゆっくりなさってください」
瀬戸がやや鷹揚に頷いて返事をすると、三橋は平岡に目だけで頷いてから、パーティーの人の群れの向こうに消えていった。その姿が見えなくなったところで、琴が突然、平岡に向き直る。